

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）
平成 30 年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	一般職員
	氏 名	馬場 景子
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	タイ
	研 修 先 機 関 名	京都大学 ASEAN 拠点 (2018 年 4 月～7 月)
	研 修 期 間	2018 年 4 月～2018 年 7 月
具体的な研修内容	<p>1. 概要</p> <p>京都大学若手人材海外派遣事業ジョン万プログラムにより、平成 30 年 4 月から平成 30 年 7 月までの 4 ヶ月間、本学 ASEAN 拠点（タイ・バンコク）における業務に従事した。ジョン万プログラムで派遣された事務職員としては、通算 12 人目となる。ASEAN 拠点は 2014 年 6 月に設置され、本学の ASEAN 地域における研究・教育活動の支援、教職員・学生の国際化、広報・社会連携・ネットワーク形成支援のための活動を行っている。</p> <p>従事した主な業務内容は、以下のとおり。</p> <p>総務関係（会議準備・資料作成、拠点スタッフの勤務管理、出張手続き、車両の手配、来客対応、HP や Facebook による情報発信、オフィス内物品管理など）、経理関係（仮払金の出納管理・報告、各種契約、立替払いなど）、教務関係（留学説明会等でのブース対応、来訪やメール等による留学相談対応など）の業務に加え、NGO 認可に伴う業務整理及び記念式典の企画並びに行事への参加など</p> <p>2. ASEAN 拠点運営業務</p> <p>拠点の構成員は、拠点所長、URA (University Research Administrator)、ジョン万プログラムにより派遣される事務職員の日本人 3 名と、タイ人スタッフ 1 名の計 4 名。オフィス内での事務的な仕事はジョン万職員が主となり、タイ人スタッフと協力しながら担当している。</p> <p>ジョン万職員は、拠点運営全般に係る大学本部との情報共有及び各種調整のほか、主に以下の業務を行っている。</p> <p>・ 仮払金の出納管理、各種契約管理</p> <p>ASEAN 拠点では、大学本部から送金される仮払金を管理・執行し、領収書を添えて執行状況を大学本部に毎月報告している。毎月 15 件程発生する支払い業務においては、タイ語・英語で発行される請求書等の内容確認及び銀行窓口での支払いを行った。</p> <p>また、オフィス賃料や水道光熱費、インターネット回線料や電話代等の基盤的な経費に係る各種契約の管理も担い、特に NGO への移行に伴う契約名義の変更においては必要書類を作成のうえ複数の業者の店舗</p>	

へ赴き、直接交渉を行った。

・車両手配

拠点スタッフのオフィス外での用務や出張、また、本学関係者の来泰時には、移動車の手配が必要となる。ASEAN 拠点においては、現地レンタカー会社等に配車を依頼することが多くある。用務当日にスムーズな移動ができるよう、関係者との事前の連絡を密にし、スケジュール調整を行った。なお、バンコクでは交通渋滞が多く発生し、場所や時間帯によっては移動に通常の何倍も時間を要することがあるため、現地の交通事情を踏まえたスケジュール管理が必要となった。

・会議資料作成（活動報告）

学内で月に一度開催される海外拠点等連絡会において、大学本部、欧州拠点及びASEAN 拠点によるテレビ会議が行われ、各拠点から1か月間の活動内容の報告を行う。これに向けて日々の業務内容や往訪・来訪の件数等を記録しておき、会議に合わせて活動報告資料の原案を作成し、URA や拠点所長の確認を経て、大学本部へ提出した。

・来訪対応

タイには本学の協定校も多数あり、長年 ASEAN 地域をフィールドとして研究している教員も多い。そのため、個々の研究活動や、全学・各部局の国際イベント等のために本学関係者が来泰する機会が多くある。また、本学と同様にバンコクにオフィスを構える日本の大学・教育研究機関関係者、本学の同窓生、タイ人研究者や学生、在タイの日本企業関係者等、4ヵ月間で延べ45名の来訪者があった。学内でも普段関わることの少ない他部局の教職員や学生、学外の様々な機関の関係者と話することで、本学の国際的な活動や幅広い交流の一端を新たに知ることができた。

・HP や Facebook による情報発信

ジョン万職員は、タイ人スタッフと協力して、ホームページと Facebook による広報関係の業務を担当している。ホームページでは主として ASEAN 地域で開催されるイベントの開催案内や、拠点からスタッフが参加した会議やイベントの参加報告等を掲載している。Facebook ではイベントの開催・参加報告のほか、研究助成や奨学金の公募情報、拠点への来訪者情報等を掲載し、より迅速かつタイムリーな情報発信を心掛けた。

	<p>3. イベント対応</p> <p>滞在期間中に以下のイベントに参加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 留学説明会への参加 <p>Mahidol Wittayanusorn School 留学フェア（ブース訪問 128 名、個別対応 50 名程度）に参加した。同校はタイ国内においてもトップクラスの学力を誇る高等学校であり、今回は Kyoto iUP（Kyoto University International Undergraduate Program）へのリクルートを主な目的として、本学の紹介及び留学相談対応を行うとともに、校長、国際部長とのネットワークを構築した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語パートナーズ派遣事業・CALL 教材贈呈式 <p>国際交流基金アジアセンターが実施する「日本語パートナーズ派遣事業」（日本語教育支援や日本文化紹介を行うパートナーを ASEAN 諸国の中学や高等学校等に派遣する事業）のレセプションにおいて、昨年と同様に、本学が開発した CALL 教材（マルチメディア多言語語学学習教材）の贈呈式が行われ（全 2 回）、うち 1 回は、拠点所長の代理として参加し、贈呈を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 京都大学東南アジア地域研究研究所所長交代パーティー <p>本学の東南アジア地域研究研究所所長が交代となったことに伴い、ASEAN 地域の関係機関に対する新所長のお披露目の機会として、同研究所が連絡事務所を置くタイ及びインドネシアにおいて所長交代パーティーが行われた。ASEAN 拠点はタイ開催分の支援（招待リストの検討、当日受付及び司会進行、音響設備貸出やケータリング手配等のタイ業者との調整）を担い、ジョン万職員は連絡事務所駐在員と連携して事前準備を行い、当日は受付を担当した。</p>
<p>本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック</p>	<p>4 ヶ月間の海外研修を経て得られた成果として、以下の 2 つの観点から記載する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 観点 1. 本学にフィードバックできる実感・気づき 観点 2. 自分自身にフィードバックできる実感・気づき <p>観点 1. 本学にフィードバックできる実感・気づき</p> <p>(1) 「京都大学」として求められる現場</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 6 月に発生したタイ北部（チェンライ）での大雨によるタムルアン洞窟の遭難事項の発生を受け、在タイ日本国大使館より、本学研究者が開発中の探索機械（水陸両用ヘビ型ロボット）及びその他の汎用可能な技術についての問い合わせがあった。このことから、災害発生時に

本学の研究成果が求められる現場があることを実感することができた。

- ・日頃から ASEAN 拠点には留学希望者からの電話問い合わせがあるが、私自身これまで部局経験がなかった為、初めて本学の教育が求められる現場を体験することができた。また、問い合わせ対応を行うなかで、情報を集約した WEB サイト（学部毎の留学相談窓口がすぐに見つけられるなど）や、拠点と部局の最新情報（特に入試関連。応募要項が公開されたタイミングでの共有など）の共有が必要であることを改めて感じた。

（2）タイから見た「京都大学」の印象

- ・Mahidol Wittayanusorn School 留学フェアへの参加を通じて、タイから見た本学の印象や留学先としてのニーズの一端を感じ取ることができた。まずは、ブースを訪れた高校生約 50 名のうち、「京都大学の名前だけ知っているがどんな大学かは知らない」又は「名前すら知らない」学生が半数以上であったことに衝撃を受けた。（これは、タイ全体の印象と捉えるにはあまりに弱い根拠ではあるが、少なくとも理系進学校において海外留学を検討している高校生において、本学は必ずしも知名度が高い訳ではないと捉えることはできるのではないか。）また、「京都大学がどの分野に強いのか」「奨学金制度は整っているのか」といった質問を多く受けたことから、本学の知名度を上げるためにも、本学の各分野の強みとニーズに合った情報を合わせた「攻め」の PR が重要だと感じた。（ASEAN 拠点タイ人スタッフ曰く、「KU」という略称は、タイでは一般にカセサート大学を連想させるものであるとのこと。）

（3）タイにおいてより効率的かつ効果的に京都大学を PR するためのヒント

- ・タイで生活して印象に残ったこととして、①SNS（Twitter や Facebook 等）が公共交通機関や企業からの公式情報の情報発信のツールとして活用されている点、②大学進学については、卒業後の進路（高所得の職業につけるか等）までをイメージする傾向にある点の 2 点があげられる。これらの気づきから、SNS を用いた具体的なロールモデル（タイ人卒業生の活躍）の発信も策の一つではないかと考える。
- ・ASEAN 拠点での業務を通じて特に印象に残ったこととして、個人対個人の関係性や信頼を大切にすることがあげられる。例えば、銀行や業

者において、支店の担当者ごとに対応が異なるのは当然のことであり、同じ組織としての均一性が重視される傾向にある日本のサービスとの違いを感じた。加えて、ASEAN 拠点業務中に見えてきたタイ機関のアプローチ方法においても、組織としての対応というよりは、担当者間の信頼に基づく調整に依るところが大きいのではないかと感じた。これらのことから、スムーズな連携を構築するためには担当者レベルでの信頼をいかに継続できるかがポイントの一つではないかと考える。

- ・本学とタイの関係機関が集う場として、東南アジア地域研究研究所所長交代パーティーを経験した。週末の開催にも関わらず多数の参加者（チェンマイから国内線利用の方も）があり、どの参加者も新旧所長との歓談を楽しまれている様子であった。これは、同研究所が長年築いてきたタイ機関との研究者ネットワークの賜物であり、今後もこの関係性を継続していきたいという双方の思いを肌で感じる機会となった。全学としては、既に多数の ASEAN の学術機関と協定を締結し、交流が行われているが、実際に人と人が会う場を持つことが今後の連携の深化にとって有効な手段であり、ASEAN 拠点 NGO 認可式典及び NSTDA との MOU 締結式（9月28日開催）をはじめ、大学本部としてもそのような機会を積極的に作ることで、外国機関とのネットワーク構築に繋がるのだと改めて実感した。

観点 2. 自分自身にフィードバックできる実感・気づき

(1) 京都大学を外側から見る経験

- ・採用以来、大学本部にて勤務してきたことから、今回の海外研修中に初めて本学を外側から見る経験ができた。具体的には上記観点 1. の (1) 及び (2) のとおりであるが、これらの経験を通じて、本学の名前と強みをより一層国外に広めていきたいという意志を強く持った。本研修後は企画・情報部企画課国際戦略掛に配属となり、本部から全学海外拠点の活動支援を行う立場となったことから、早速そのチャンスが巡ってきていると感じている。本部と現場（全学海外拠点）間の日頃からの情報共有を密に行い、本学の国際プレゼンスの向上に寄与したいと考えている。

(2) 在タイ日本人コミュニティ（アカデミアに関わる本邦機関や日本の大学からの駐在者との出会い）

- ・京都にいる間はなかなか知り合うことのできない、異なる背景を持つ機関・立場の方々とお会いする機会が豊富にあり、機関を越えて協力

する意識を持つ貴重な人脈を育むことができた。現在の業務内容だけでなく、社会人の先輩としても沢山のことを教えていただき、この出会いは本研修で得た大きな収穫であったと感じる。

(3) 英語による業務からの学び

・ASEAN 拠点タイ人スタッフとの業務は全て英語で行った。これにより、日本語では曖昧にできていた内容でも、英語では白黒がはっきりした伝え方に寄せる必要が発生し、曖昧さを残さない業務の進め方（趣旨、手段を明確に理解すること）を改めて見直すことができた。

(4) 笑顔で臨む姿勢

・タイ滞在中、業務内外問わず、笑顔になる機会がとても多かったことが印象に残った。特に、多数陪席した他機関の方との打合せにおいては、いつでも基本的には笑顔で、和やかな雰囲気であった。日頃から笑顔でいることは、言ってしまうと簡単なことではあるのだが、お互いに歩み寄ろうとする主体性の表現方法の一つであるともいえる。「まずはお互いに笑顔になることから始める意識」が、ゆくゆくは大きな連携に発展するとも考えられるという発見を得ることができた。

以上の観点で述べた実感・気づきは今後の職員としてのキャリアにおいて自分の支柱となり得るものであり、このような経験を積ませていただいた本部関係部署、関係部局、ASEAN 拠点、現地関係機関のすべての方々に心から感謝したい。これからは、この思いを忘れずに、企画・情報部企画課国際戦略掛の一員として、より一層の全学海外拠点の活躍、学内の国際関係部署の連携強化をサポートすることにより、本学の国際プレゼンスの向上に寄与したいと考える。